黒い羊効果における感情的側面の検討

— 日常生活における内集団に着目して —

○長峯聖人¹・外山美樹²

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科・²筑波大学人間系)

キーワード：黒い羊効果, 内集団バイアス, 感情

The research of the side of emotion on black sheep effect: Focus on ingroup in everyday

Masato NAGAMINE¹ and Miki TOYAMA²

(¹Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, ²Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba.)

Key Words: black sheep effect, ingroup bias, emotion

目 的

内集団の好ましくない成員が外集団の好ましくない成員よりも低く評価される黒い羊効果 (Marques, Yzerbyt, & Leyen, 1988) は内集団バイアス (Tajfel & Turner, 1979) の特殊な形であると考えられているが, 内集団バイアスと比較して関連する研究はそれほど多くない。そのため, 黒い羊効果が持つ機能について, いくつか明らかにされていない点がある。その1つに, 感情がある。内集団バイアスに関して, 集団間比較状況における感情が社会的アイデンティティに影響を及ぼす (Kessler & Hollbach, 2005) ことが示されているが, 黒い羊効果が生じる状況における感情が個人にどのような影響を与えるのかについて, 十分に検討されているとは言えない。

そこで本研究では, 内・外集団の好ましくない成員に対する感情に焦点を当て, 黒い羊効果における感情的側面を探索的に検討することを目的とする。検討にあたり, 黒い羊効果が日常の中で生じやすい (Marques & Paetz, 1994) ことから, 内集団を, 日常において所属を強く意識している集団に設定する。

方 法

調査対象者 関東地方の大学に通う大学生 227 名 (男性 135 名, 女性 92 名) を対象にした。平均年齢は 19.23 歳 ($SD=1.15$) であった。

調査内容 普段の生活において所属を最も意識している集団 (他の集団との競争があるものに限る) について想起するよう求めた。さらに, 所属している集団 (以下, 内集団) と他の集団 (以下, 外集団) が競争している状況において好ましくないと思う人物について記述を求め, その人物が内・外集団にいた場合にどの程度好ましいー好ましくないと思うかについてそれぞれ 9 件法で尋ねた。この際, 好ましくないと思うほど得点が低くなるように設定した。

その後で, 予備調査に基づいて作成した内集団の好ましくない成員に対する感情尺度 24 項目 (5 件法) について回答を求めた。なお, 外集団の好ましくない成員についても同様に回答を求めた。

結 果

内集団の好ましくない成員に対する感情尺度の因子構造

内集団の好ましくない成員に対する感情尺度に対し, 最尤法, Promax 回転による因子分析を行ったところ, 最終的に 18 項目が残り, 3 因子解が得られた。第 1 因子は“むかつく”, “いらいらする”などの項目が高い負荷量を示したため, “敵意・怒り”と命名した。第 2 因子は“信じてあげたい”, “許してあげたい”などの項目が高い負荷量を示したため, “共感”と命名した。第 3 因子は“残念に思う”, “がっかりする”などの項目が高い負荷量を示したため, “他者に起因する抑うつ・落ち込み”と命名した。

その後, 得られた各因子に高い負荷量を示した項目で下位尺度を構成した。各下位尺度で Cronbach の α 係数を算出したところ, “敵意・怒り”で .87, “共感”で .81, “他者に起因する抑うつ・落ち込み”で .82 であった。

また, 外集団の好ましくない成員に対する感情についても同様に因子分析を行ったところ, ほぼ同一の因子構造が得られた。さらに, 同様に α 係数を算出したところ, “敵意・怒り”で .86, “共感”で .80, “他者に起因する抑うつ・落ち込み”で .79 であった。

内・外集団の好ましくない成員に対する感情における群間差

内集団の好ましくない成員に対する好ましさの評価得点から外集団の好ましくない成員に対する好ましさの評価得点を引いて差得点を算出し, 差得点が負だった者を黒い羊効果群 ($n=62$), 正だった者を内集団バイアス群 ($n=91$), 0 だったものを平等群 ($n=74$) とした。

その後, 群を独立変数, 内・外集団の好ましくない成員に対する感情を従属変数とした一要因分散分析ならびに多重比較 (Bonferroni 法) を行った。結果を Table 1 に示す。分析の結果, 内集団の好ましくない成員に対する“敵意・怒り”では黒い羊効果群の得点が高かった。また, 外集団の好ましくない成員に対する“敵意・怒り”では黒い羊効果群の得点が内集団バイアス群よりも低く, 外集団の好ましくない成員に対する“他者に起因する抑うつ・落ち込み”では黒い羊効果群の得点が高かった。

考 察

以上より, 内集団の好ましくない成員に対しては 3 つの感情が生じることが示された。また, 黒い羊効果が生じていた場合には内集団の好ましくない成員に対して怒りや敵意が生じやすく, 外集団の好ましくない成員に対しては生じにくいことが示唆された。これらの結果から, 黒い羊効果が持つ機能を検討する上で, 怒りや敵意といった感情とその方向性が重要な役割を担っていることが考えられる。

Table 1
内・外集団の好ましくない成員に対する感情の分散分析結果

	F 値	η^2_p	多重比較 (Bonferroni 法, 5%水準)	MSe
敵意・怒り (内)	8.36 ***	.07	内集団, 平等 < 黒い羊	35.5
共感 (内)	3.00	.03	ns	18.2
他者に起因する抑うつ・落ち込み (内)	0.04	.00	ns	19.6
敵意・怒り (外)	5.64 **	.05	黒い羊 < 内集団	35.2
共感 (外)	1.74	.02	ns	18.1
他者に起因する抑うつ・落ち込み (外)	5.83 **	.05	黒い羊 < 内集団, 平等	19.5

* $p < .01$, ** $p < .001$

注1) (内) は内集団の好ましくない成員に対する感情を, (外) は外集団の好ましくない成員に対する感情を示す。

注2) “黒い羊”は黒い羊効果群を, “内集団”は内集団バイアス群を示す。

注3) MSe: 多重比較検定時における誤差の平均平方